キューバ外交　芸術から改善を　読売新聞-1986.06.20

論点

キューバ外交 芸術から改善を

中嶋 嶺雄（なかじま みねお）
（東京外国語大教授）

さる六月七日土曜の夜の東京は、あいにくの小雨模様だったが、私にとっては大変印象的な場面がその一角で展開されていた。キューバが生んだ三十歳の世界的なピアノの名手、ホルヘ・L・プラッツを囲む小さなコンサートが、南麻布のキューバ大使公邸で催されていたのである。

ロン＝ティボー国際コンクールのグランプリをはじめ数々の最高賞を獲得したプラッツの演奏は、技巧的にも圧巻であったが、なによりもキューバ人の情熱がけん盤上にみなぎっていて、その夜の小人数の聴衆を魅了しつくした感があった。

とくに最後の曲目、リストのスペイン狂詩曲は、演奏やレコーディングの機会が少ないものであるけれど、プラッツの〝十八番〟だそうで、コレルリのバイオリンの名曲でも知られるイベリア半島の民俗舞曲ラ・フォリアの旋律が織り込まれていることこの曲などは、やはりスペイン系のキューバ人ならではの演奏ぶりであった。

私がこのように感動したのは、プラッツの見事な演奏もさることながら、キューバといういわば小国の芸術が、今日のような〝文化氾濫（はんらん）〟のわが国でさえ、ほとんど受容されていないことに由来すると同時に、この六月末に沖縄で開催予定の男子バレーボールの親善試合に来日するキューバ人チームに、日本政府が入国ビザを発行しないとの報道に接した直後だったからでもある。〝新聞報道によると、米軍基地のある沖縄に、アメリカと対立関係にあるキューバのチームが来訪することは「国益上好ましくない」との政府の判断があったからだという。

幸いにしてこの驚くべき措置は、地元・沖縄県の強い要請もあって撤回されたとのことであるが、もしも、わが政府・外務省に、そのようなキューバ観が根強いとしたら、それはきわめて短絡的な対米追随外交のパターンから依然として脱していないことの証明であるばかりか、今日のキューバとその国際環境に対する認識の欠如を示すものだといわざるを得ない。

私自身、一九八二年の暮れに、当時の外務省中南米局長のお世話で初めてキューバを訪れて認識を新たにしたのであるが、カストロ議長（首相）指導下のキューバは、まぎれもない革命国家ではあるけれど、それはまさに〝トロピカル・ソシアリズム（熱情社会主義）〟とでも命名すべき、情熱的であけっぴろげなラテンアメリカ民族の国であって、また同時に、きわめて親日的な社会主義国なのである。

そのようなキューバは、今日の国際情勢のなかで、とくにニカラグアに対するレーガン政権の強硬な姿勢に直面して、対米非難の急先鋒（せんぽう）ではあるけれど、一方では対米関係の改善を一貫して模索しており、そのためにも日本に対する期待を強く抱いているのである。

しかも、革命後二十八年を迎えようとしている最近のキューバは、これまでのように中南米諸国の孤児ではなく、ペルーをはじめブラジル、ウルグアイ、ベネズエラ、コロンビアなど、従来、関係の悪かったラテンアメリカ諸国との外交関係を大幅に改善しており、キューバの影響力はいまや無視し得ないものになっている。

多くのラテンアメリカ諸国にとっては、対外債務をはじめとする深刻な経済危機に対するアメリカの対応が十分でないことへの不満がつのりつつある半面、東西関係よりも南北関係を重視せざるを得ない当面の国情において、やはりキューバは社会体制の相違を超えて、同胞としての親近感を抱かざるを得ない国際政治上のリーダー国なのだ。

このような情勢を考慮すれば、なおさらのこと、わが国にとっては、幅広い外交的選択肢を維持していくためにも、キューバとの関係はきわめて重要だといえよう。かつては厳しく対立していた中国＝キューバ関係も大幅に改善されつつあり、わが国の対共産圏外交にとっても、キューバの存在は大きいといえよう。

できれば、わが国首脳のキューバ訪問やカストロ議長の訪日も実現すべきであろうが、さしあたりは、芸術やスポーツ、それに学術交流などがきわめて重要であることはいうまでもない。

それなのに、かろうじて保たれているのは、小規模な経済関係のみである。この現状を顧みたとき、私にとって六月七日は、改めて多くのことを考えさせられた一夜であった。